

伊藤悠貴 (チェロ)

齋藤秀雄メモリアル基金賞受賞記念コンサート

曲目解説

ラフマニノフの作品

「夕闇は迫り」(伊藤悠貴編)

1891年に作曲されたラフマニノフ初期の歌曲で、詩はアレクセイ・トルストイ(有名な文豪ではないほう)による。静かな夕暮れのひと時、かつての恋人の面影を追う、透明感のある作品である。

「ロマンス へ短調」(伊藤悠貴編)

1890年に作曲されたチェロとピアノのための作品。ラフマニノフはモスクワ音楽院ピアノ科を首席で卒業、同じく首席だったスクリャービンと金メダルを分け合った。若書きの作品ながら、チェロの旋律には哀愁が漂い、深い情緒が感じられる。

歌劇《アレコ》より「カヴァティーナ」、「若いジプシーのロマンス」(伊藤悠貴編)

1892年、ラフマニノフはモスクワ音楽院作曲科の卒業制作として、プーシキンのも物語詩を素材に歌劇《アレコ》をわずか数日で完成。チャイコフスキーの助力もあって、翌年にはポリショイ劇場で初演された。筋書きは、若いジプシー娘をめとったアレコが、奔放な妻の不貞に逆上し、浮気相手もろとも刺殺してしまうというもの。「カヴァティーナ」は、妻の心変わりを知ったアレコが、愛憎半ばする暗い激情に引き裂かれて苦悶する歌で、単独で取り上げられることも多い。「若いジプシーのロマンス」は、悲劇が起こる直前の逢引きで、ジプシーの若者が歌う恋の歌。原曲もハープ伴奏となっている。

《6つのロマンス》(伊藤悠貴編)

《6つのロマンス》作品4は、1893年に完成したラフマニノフ最初の歌曲集。「お願いだ、行かないで」は、その冒頭を飾る失恋の歌。ロシア象徴主義の詩人ドミトリー・メレシュコフスキーの詩を用い、苦渋に満ちた愛の別れを描く。「朝」は、朝(女)から昼(男)への告白という擬人化によって、初々しい恋の始まりを描いている。「夜のしじま」は、19世紀ロシアの詩人アフナーシー・フェートの詩による。濃厚なロマンティズムが漂う曲で、遠縁の親せき

にあたるヴェーラに献呈された。ヴェーラは一時期ラフマニノフが強く惹かれた娘。「歌うな、美しい人よ」は、有名なプーシキンの詩による、作品 4 の白眉とも言える曲。哀切なピアノ伴奏に続いて、「悲しいグルジアの調べを思い出させないでくれ」と歌う。ほのかに東洋を感じさせる調べが心にしみる。「ああ、私の畑よ」は、A.トルストイ(前出)の詩による。ロシア的な暗い情念のうごめく様が、民謡調の旋律とともに悲哀を感じさせる。「昔のことだろうか、友よ」は、ムソルグスキー作品の作詞でも知られるゴレニシチェフ・クトゥーゾフによる詩。かつての別れの悲しみが、再会への歓びへと変わっていく。

チェロ・ソナタ

ラフマニノフ唯一のチェロ・ソナタ。交響曲第 1 番の初演失敗により、ラフマニノフは深刻なスランプに陥ったが、ピアノ協奏曲第 2 番の成功で劇的な復活を遂げる。このチェロ・ソナタは復活直後の 1901 年、名チェロ奏者ブランドゥコフとの親交から生まれた。

全 4 楽章からなり、第 1 楽章は、不安げな眼差しをそっと開けるようなレントの序奏に始まり、アレグロ・モデラートの主部では「ラフマニノフ節」とでもいうべき、憂愁に満ちた旋律が心を揺さぶる。第 2 楽章のユニークなスケルツァンドは、諧謔的なリズムと抒情的な旋律がチェロによって奏される。第 3 楽章は全曲中もっとも抒情味あふれる楽章で、ロマンティズム全開の夢見るような旋律がほとばしる。そして第 4 楽章は、創作力を取り戻したラフマニノフの自信がみなぎる、充実したソナタ形式のフィナーレとなっており、華やかに曲を閉じる。